

青年期の自我発達上の危機状態に対する無意識水準の エディプス(エレクトラ)・コンプレックスの影響

長 尾 博

The Influence of Unconscious Oedipus/Electra Complex on Ego Developmental Crisis State during Adolescence

Hiroshi NAGAO

The purpose of this study was to investigate the influence of unconscious Oedipus/Electra complex on ego developmental crisis state during adolescence. One hundred fourteen senior high school students completed ego developmental crisis state scale (Nagao, 1989). They were divided into high or low groups by the mean value of this scale. Each boy and girl of two groups was administered to preconscious Oedipus/Electra complex test (Friedman, 1952) and unconscious complex test (Szondi test). The main results were as follows; (1) According to the results of Szondi test, it was found ego developmental crisis state was not influenced by unconscious Oedipus/Electra complex. (2) However, on basis of the results of Friedman's test, the preconscious conflicts on infantile parent-child relation were related with ego developmental crisis state during adolescence. (3) Moreover, by the results of those three tests, it was suggested to be existence of the stratified construction of mind, i.e. from conscious, preconscious level to unconscious level, from the view of psychoanalysis.

Key words; adolescence, ego developmental crisis state, Oedipus complex, Electra complex, the stratified construction of mind

【要約】

本研究は、青年期の自我発達上の危機状態に対する無意識水準のエディプス(エレクトラ)・コンプレックスの影響を明らかにするものである。114名の高校生男女に青年期の自我発達上の危機状態尺度(長尾、1989)を実施した。この結果の平均値にもとづいて、平均値より高い男子1名、女子1名と平均値より低い男子1名、女子1名に対して、フリードマンの物語記述テスト(Friedman、1952)とソンディ・

テストを実施した。4 ケースの主な点は、以下のとおりであった。(1) ソンディ・テストの結果から、青年期の自我発達上の危機状態に対して無意識水準のエディプス (エレクトラ)・コンプレックスは影響していないことが認められた。(2) また、物語記述テストの結果から、青年期の自我発達上の危機状態に対して前意識水準の幼児期における親子関係の葛藤が影響していることが認められた。(3) 3 種類のテスト結果から、精神分析学派がいうように意識水準、前意識水準、無意識水準の心の層構造が存在することが示唆された。

キーワード

青年期、自我発達上の危機状態、エディプスコンプレックス、エレクトラコンプレックス、心の層構造

【問題】

本研究は、青年期の自我発達上の危機状態 (ego developmental crisis state) に対する無意識水準のエディプス (エレクトラ)・コンプレックス (Oedipus/Electra complex) の影響を明らかにするものである。長尾 (1989) は、青年期の自我発達上の危機状態を“中学生時から高校生時にかけて親子関係における独立と依存の葛藤や自我同一性の確立の葛藤が生じ、交友関係も困難となって、とくに自我の弱い者は閉じこもりなどの非社会的行動や精神・身体的症状をともなう不適応状態を呈することもある状態”と定義した。この定義の特徴として、これまでの青年期危機概念を整理して自我の発達という視点からとらえる発達心理学的観点と、適応という視点からとらえる臨床心理学的観点との2点から構築されていることがあげられる。また、長尾 (1989) は、この定義にもとづいて、おもに青年期の自我同一性や親子関係上の葛藤を測定するA水準項目 (問題内省水準: 5件法で26項目) と不適応状態を測定するB水準項目 (問題自覚水準: 3件法で24項目) とで構成される質問紙尺度を作成した。この尺度の信頼性については、長尾 (1995) の研究から再検査法によって尺度の安定性が、また折半法によって尺度の内的一貫性が検証されている。また、尺度の併存的妥当性については、長尾 (1992) の研究から不登校や緘黙などの非社会的行動を示す青年に対しては検証されている。さらにこの尺度による長尾 (2002) の学年差と性差の研究結果から、中学生の場合には性差がみられ、中学生と高校生は、大学生よりも青年期の自我発達上の危機状態が高いことが明らかにされている。

精神分析の創始者 Freud (1905) は、男子の青年期を、児童期まで無意識世界に抑圧されていたエディプス・コンプレックスが顕在化され、心的動揺が高まる時期ととらえている。エディプス・コンプレックスとは、馬場 (1975) によれば、男児が4歳~6歳になると、母親への愛着と同時に父親をその競争相手として敵視するような無意識世界にある感情のこと

をいう。Freud (1928) は、“少年の父親に対する関係は、われわれの用語でいえば、アンビヴァレント（両価的）なものである。競争者としての父親を亡き者にしたいという憎悪感のほか、父親に対する一定度の愛情が在する。これは、正常な過程であり、これをエディプス・コンプレックスという”と定義している。また、Jung (1913) は、4歳から6歳までの女兒の発達過程にみられる女兒が抱く父親への愛着と母親への敵意、恨みをふくむ無意識世界にある観念複合体をエレクトラ・コンプレックスと名づけた。Jung (1913) によれば、エレクトラ・コンプレックスとは“男根期以前の女兒は、母親との情緒的結合が親密であったが、自分にはペニスがないことに気づくと同時に、自分の信頼する母親にもペニスがないことを知り、大きな失望や憤りを抱く。このように女兒の場合には、依存対象であった母親から父親へと愛情が移り、母親が逆に敵意の対象となりやすい。このような男児のもつエディプス・コンプレックスに相当する無意識のコンプレックスをエレクトラ・コンプレックスという”と定義されている。また、宮城 (1956) によるエディプスとエレクトラのコンプレックスの定義によれば、両コンプレックスは父親に対するか母親に対するかの対象の違いだけでその機能やメカニズムに大きな差はないことが説かれている。

Freud (1905) は、青年期における心的動揺はエディプス・コンプレックスの顕在化が起因していることを説き、村瀬 (1976) も青年期の危機は生育史上、両親との葛藤が無意識的であればあるほど真の危機としておとずれやすいと述べて、青年期の危機と無意識世界のコンプレックスとの関係を強調している。このことに関して、長尾 (1999) の青年期の自我発達上の危機状態と前意識水準のエディプス (エレクトラ)・コンプレックスとの関連を明らかにした実証的研究結果では双方に強い関連がないことが示されている。この研究では、健常高校生140名を対象に長尾 (1989) の青年期の自我発達上の危機状態尺度と Friedman (1952) の物語記述テストを用いている。

ところで精神分析学派や分析心理学派では、心の問題や不適応は、無意識世界のコンプレックスから起因していることを想定して、この無意識を層構造としてとらえている(河合、1977)。このようなとらえ方は、19世紀における神経学者の Jackson や哲学者の Hartmann における層理論 (Schichtentheorie) から由来しており、これをもとに Freud (1905) によるエディプス・コンプレックス、Jung (1952) による普遍的無意識 (collective unconsciousness)、Szondi (1947) による家族的無意識 (family unconsciousness) などの概念が唱えられた。つまり、無意識世界は、Freud (1915) のいうように前意識 (preconsciousness) という思い出そうとすれば思い出すことができる精神領域から意識に入ることができない抑圧された無意識世界までの層構造をなしているにとらえられている。果たして無意識世界は、精神分析学派や分析心理学派がいうように層構造をなしているのだろうか。

Shneidman (1949) は、各心理テストによって意識水準から無意識水準までの内容が測定できると唱えており、とくに質問紙法のテストは意識水準の内容が、また TAT のような物

水準	心理テストの種類	測定される内容
意識水準	長尾 (1989) による青年期の自我発達上の危機状態尺度	青年期の自我発達上の危機状態
前意識水準	Friedman (1952) による物語記述テスト	エディプス (エレクトラ)・コンプレックスの有無、および幼児期の親子関係の葛藤
無意識水準	Szondi (1937) によるソンディ・テスト	エディプス (エレクトラ)・コンプレックスの有無、および他のコンプレックスの有無とパーソナリティ特性

Fig. 1 本研究における仮説

語記述法は前意識水準が、さらにロールシャッハ・テストのような投影法のテストは無意識水準の内容が測定できるととらえている。山本 (1999) は、物語記述テストである TAT は、無意識内容をレントゲンのように引き出せるものではなく、その結果は、自我統制された空想、認知的産物、創造的構成物、体験過程にもとづくものであると説いている。一方、とくに家族的無意識内容を測定するソンディ・テストに関して、大塚 (2000) は、ロールシャッハ・テストや TAT などのように言語を媒介としたものではなく、無意識水準までのパーソナリティを直接的にアプローチしていくテスト法であることを説いている。

そこで、筆者は、上記のような河合 (1977) の無意識世界の層構造論や Shneidman (1949) の心理テスト論にもとづいて、青年期の自我発達上の危機状態とエディプス (エレクトラ)・コンプレックスとの関係に関して Fig. 1 に示す仮説を設定した。Fig. 1 に示す仮説は、(1)既述した山本 (1999) による TAT のとらえ方にもとづいて、前意識水準のエディプス (エレクトラ)・コンプレックスは、Friedman (1952) による物語記述テストで測定できるであろう。(2)既述した大塚 (2000) によるとらえ方にもとづいて、無意識水準のエディプス (エレクトラ)・コンプレックスは、Szondi (1937) によるソンディ・テストで測定できるであろう。(3)(1)と(2)の仮説を検証するために青年期の自我発達上の危機状態の現われ方、とくにこの尺度の高得点群と低得点群とを基準にして青年期の自我発達上の危機状態と物語記述テストで測定されたエディプス (エレクトラ)・コンプレックスとの関係、及び青年期の自我発達上の危機状態とソンディ・テストで測定されたエディプス (エレクトラ)・コンプレックスとの関係を明らかにしていく必要があるととらえた。

【方法】

1. 調査対象

福岡県内の県立高校普通科 1 年生男子 79 名と女子 35 名、合計 114 名

2. 調査時期

2002 年 5 月に各クラスごとに長尾 (1989) の青年期の自我発達上の危機状態尺度を一斉に

実施した。

3. 手続き

- (a) 青年期の自我発達上の危機状態を測定するために、長尾 (1989) による尺度を用いた。この尺度のA水準項目は、「全くそのとおりである」の5点から「全くそうでない」の1点までの5件法で得点化し、B水準項目は、「はい」を3点、「いいえ」を1点、「わからない」を2点として、得点が高いほど危機状態が高いととらえるようになっている。



Fig. 2 物語記述テストに用いた絵 (Friedman, 1952)

- (b) 前意識水準のエディプス(エレクトラ)・コンプレックスを測定するために、Friedman (1952) による物語記述テストを用いた。このテストは、男子を対象とする場合には、Fig. 2 に示す絵を見せて、一方、女子を対象とする場合には、Fig. 2 に示す男児の絵を女児の絵に変えた絵を見せて思いつく物語を自由に書かせ、その内容から評定を行うものである。前意識水準のエディプス(エレクトラ)・コンプレックスの評定基準として、男子の場合には、Fig. 2 の父親に対して否定的内容が、また、母親に対して肯定的内容が明らかに書かれている場合を3点、3点の場合ほどは明らかに書かれていないが親子関係上の葛藤が書かれている場合を2点、両親に対して肯定的内容が書かれている場合を1点とした。つまり、得点が高いほど前意識水準のエディプス・コンプレックスが強いととらえるようにした。一方、女子の場合には、Fig. 2 の母親に対して否定的内容が、また、父親に対して肯定的内容が明らかに書かれている場合を3点とし、2点と1点の評定は男子の場合と同様に行った。評定は、女子大学3年生3名が行った。評定の一致率は85%であった。一方、意識水準のエディプス(エレクトラ)・コンプレックスの評定については、被験者に自らが書いた物語内容を読ませて父親、母親、子どもの三者の関係についてを問い、「大変よい関係と思う」の2点から「大変わるい関係と思う」の-2点までの5件法で評定させた結果とした。つまり、被験者に Fig. 2 を見て反応した内容を刺激として評定してもらった。得点が高いほど意識水準のエディプス(エレクトラ)・コンプレックスは弱いととらえるようにした。このような手続きをとったのは、もともとなる刺激を同一にしておかないと意識水準まで認知される過程が歪曲されるととらえたからである。このテストの妥当性と信頼性については、長尾 (1996a) による高校生男子41名を対象とした去勢不安質問紙テスト、両親イメージSD法テスト、動的家族画テスト、ロールシャッハ図版による両親イメージテスト、および言語連想テストの5種類のテスト・バッテリーによる結果から検証されている。しかし、高校生女子を対

象としたこのテストの信頼性と妥当性は検証されていない。また、このテストの学年差については、長尾（1996b）の女子を対象とした結果から高校生時がもっともエレクトラ・コンプレックスが顕在化しやすいことが明らかにされている。

- (c) 無意識水準のエディプス（エレクトラ）・コンプレックスを測定するために、Szondi（1937）が作成したソンディ・テストを用いた。このテストは、西欧の精神疾患患者の48枚の顔写真を6組にしたものを各組ごと被験者に好きな写真2枚と嫌いな写真2枚を6回、選ばせるものである。次に各組で残った4枚の写真から嫌いな写真を2枚選ばせ、その内容をもとにTable 1に示すカテゴリーに分類するものである。

エディプス（エレクトラ）・コンプレックスの有無をとらえる基準として、Szondi（1937）、Yarritu（1955）、Coulter（1959）は、CベクターにおいてC=-+反応が見られることを強調している。この反応は、古い関わり対象から離れることのできない近親相姦的結合を反映しているといわれる。また、大塚（1974）によればC=-+反応は、児童期に見られず、青年期に示されやすいことが明らかにされている。そこでソンディ・テストにおいて、C=-+反応が生じるかどうかを無意識水準のエディプス（エレクトラ）・コンプレックスの有無をとらえる基準とした。

Table 1 ソンディ・テストの衝動分類（Szondi, 1937）

4種の衝動圏	8種の衝動因子と疾患	衝動傾向とその衝動心理学的意義
I 性衝動：S (Sexualtrieb) 性的疾病の遺伝圏	1 同性愛：h 母性的欲求(エロス)	h+：個人的情愛、情緒的、小児的、軟らかい傾向 h-：集合的情愛、博愛、人間愛、文化的欲求
	2 加虐愛：s 父性的欲求(タナトス)	s+：能動性、攻撃性、硬い傾向 s-：受動性、犠牲的、怠惰、文明的欲求
II 発作衝動：P (Paroxysmaltrieb) 発作的疾病の遺伝圏	3 てんかん：e 倫理的欲求	e+：善、良心的、慈悲、アベルへの傾向 e-：悪、憎悪、激情、カインへの傾向
	4 ヒステリー：hy 道徳的欲求	hy+：自己顕示への傾向、賞賛欲、露出的 hy-：自己隠蔽への傾向、臆病、空想的
III 自我衝動：Sch (Ichtrieb) 分裂型疾病の遺伝圏	5 緊張病：k 所有への欲求	k+：内閉性、理知的、物質的、形式的 k-：適応性、抑制的、否定的、拒絶的、破壊的
	6 妄想病：p 存在への欲求	p+：外向性、情緒的、精神的、熱狂的 p-：過敏、他罰的、好訴的、懐疑的
IV 接触衝動：C (Kontakttrieb) 循環性疾病の遺伝圏	7 鬱状態：d 探求と執着の欲求	d+：物質的価値追求、好奇心、不誠実 d-：保守的、誠実、儉約、執着的
	8 躁状態：m 依存と離別の欲求	m+：依存的傾向、快樂的、情緒的 m-：孤立的傾向、放浪性、冷淡

【結果と考察】

1. 青年期の自我発達上の危機状態高得点群について

本研究の青年期の自我発達上の危機状態尺度の平均値を男女別にまとめたものが Table 2 である。Table 2 の男女別青年期の自我発達上の危機状態総得点の平均値をもとに平均値より高得点の男子生徒 1 名、女子生徒 1 名をランダムサンプリングして彼らに Friedman (1952) の物語記述テストとソンディ・テストを実施した。男子生徒 A 君と女子生徒 B さんの結果は、以下のとおりであった。

Table 2 青年期の自我発達上の危機状態尺度の平均値

尺度	性	
	男子	女子
A 水準	78.81 (11.90)	77.45 (12.12)
B 水準	39.72 (7.30)	40.11 (6.30)
総得点	118.52 (11.72)	117.64 (13.63)

() 内の数値は、標準偏差値を表す

(a) A 君の結果と考察

i) 青年の自我発達上の危機状態の結果

A 水準 … 97点
 B 水準 … 53点
 総得点 … 150点

ii) 物語記述テストの結果

前意識水準の得点 … 2 点
 意識水準の得点 … -1 点

テストの内容

窓の下にいるのは、子どもで、2 人で立っているのは両親です。両親は、子どもにひとりで留守番させて、7 時間後に帰った。子どもはこわさにおびえていた。

iii) ソンディ・テストの結果

C = 0 + 反応からエディプス・コンプレックスは、潜在していないことがとらえられた。S = + ! - ! ! 反応がみられ、これは平凡反応であり、P = - - 反応がみられ、憎悪感情を隠す傾向がみられた。Sch = + ! 0 反応がみられ、自己中心的、融通性の欠如がみられた。また、C = 0 + 反応から、甘え、依存性の強さがみられた。これらのことから、口愛期 (oral phase) に固着した Abraham (1924) がいう依存的、愛情欲求の強い口愛性格 (oral character) がとらえられた。

iv) A 君のテスト結果の考察

A 君のテスト結果から、Fig. 3 のとおりの心の層内容がとらえられた。つまり、A 君は、青年期の自我発達上の危機状態に直面しており、この状態は、前意識水準での幼児期の親子関係の葛藤が影響しているととらえられた。しかし、無意識水準では、口愛期にリビドーが固着しており、母親への依存や愛情欲求が強いことがとらえられ

水準	心の内容	心理テスト
意識水準	青年期の自我発達上の危機状態	青年期の自我発達上の危機状態尺度
前意識水準	幼児期の親子関係の葛藤あり	物語記述テスト
無意識水準	口愛期的性格	ソンディ・テスト

Fig. 3 A君の心の層内容

た。

(b) Bさんの結果と考察

i) 青年期の自我発達上の危機状態の結果

A水準 … 103点

B水準 … 52点

総得点 … 155点

ii) 物語記述テストの結果

前意識水準の得点 … 2点

意識水準の得点 … 2点

テストの内容

今から自殺すると子どもに親が言っている。親は、子どもにどうしたいか（生きていかそれともいっしょに死にたいか）を聞いている。子どもは、わけもわからずおびえている。

iii) ソンディ・テストの結果

C=++反応からエレクトラ・コンプレックスは、潜在していないことがとらえられた。S=+±反応がみられ、これは脱低文化型平凡反応であり、性欲の高まりがみられた。P=0±反応がみられ、陰険な感情表出傾向がみられた。Sch=-!!-反応がみられ、願望を抑圧し、順応的自我傾向がみられた。また、C=++反応から対象への移り気な傾向がみられた。これらのことから、Reich (1933) という自己の女性性を誇示し、多数の異性を意識して関わろうとする男根期自己愛性格(phallic narcissistic character) がとらえられた。

iv) Bさんのテスト結果の考察

Bさんのテスト結果から、Fig. 4 のとおりの心の層内容がとらえられた。つまり、Bさんは、青年期の自我発達上の危機状態に直面しており、この状態は、前意識水準での幼児期の親子関係の葛藤が影響しているにとらえられるが、意識水準では、この葛藤は反動形成 (reaction formation) という防衛機制によって意識化はされていない。

水準	心の内容	心理テスト
意識水準	青年期の自我発達上の危機状態	青年期の自我発達上の危機状態尺度
	幼児期の親子関係の葛藤を抑圧	物語記述テスト
前意識水準	幼児期の親子関係の葛藤あり	
無意識水準	男根期自己愛性格	ソンディ・テスト

Fig. 4 Bさんの心の層内容

また、無意識水準では、性欲の高まりとともに異性へ接近したい願望がとらえられ、その関わりも移り気なところがあり男根期自己愛性格が潜在しているととらえられた。

2. 青年期の自我発達上の危機状態低得点群について

Table 2の男女別青年期の自我発達上の危機状態総得点の平均値をもとに平均値より低得点の男子生徒1名、女子生徒1名をランダムサンプリングして彼らに、Friedman (1952)の物語記述テストとソンディ・テストを実施した。男子生徒C君と女子生徒Dさんの結果は、以下のとおりであった。

(a) C君の結果と考察

i) 青年期の自我発達上の危機状態の結果

A水準 … 50点

B水準 … 31点

総得点 … 81点

ii) 物語記述テストの結果

前意識水準の得点 … 1点

意識水準の得点 … 1点

テストの内容

「今からどこか、行きたいね」「公園へ行きたい」「じゃあ、3人で行こうか」「やった」

iii) ソンディ・テストの結果

C = - + 反応からエディプス・コンプレックスが潜在していることがとらえられた。S = ++ 反応がみられ、性衝動の強さや攻撃的性衝動がみられた。P = 0 - 反応がみられ、過敏性、配慮的対人関係がみられた。Sch = - 0 反応がみられ、抑圧的、外界へ順応しようとする傾向がみられた。これらのことから、エディプス・コンプレックスを抑圧している点をとらえられた。

水準	心の内容	心理テスト
意識水準	とくに葛藤なし	青年期の自我発達上の危機状態尺度
前意識水準	とくに葛藤なし	物語記述テスト
無意識水準	エディプス・コンプレックス有り	ソンディ・テスト

Fig. 5 C君の心の層内容

iv) C君のテスト結果の考察

C君のテスト結果から、Fig. 5のと通りの心の層内容がとらえられた。つまり、C君は、まだ青年期の自我発達上の危機状態に直面しておらず、意識水準と前意識水準ではエディプスの葛藤も意識化されていないが、無意識水準では、エディプス・コンプレックスが潜在しており、それを自我が抑圧していることがとらえられた。

(b) Dさんの結果と考察

i) 青年期の自我発達上の危機状態の結果

A水準 … 66点

B水準 … 27点

総得点 … 93点

ii) 物語記述テストの結果

前意識水準の得点 … 1点

意識水準の得点 … 1点

テストの内容

子どもは、昨日、おじいちゃんとおばあちゃんに買ってもらったぬいぐるみで楽しそうに遊んでいて、親はその様子をたのしそうに見ている。

iii) ソンディ・テストの結果

C=+±反応からエレクトラ・コンプレックスは潜在していないことがとらえられた。S=0-反応がみられ、自己犠牲的マゾヒズム傾向がみられた。P=-0反応がみられ、激情をうっ積する傾向がみられた。Sch=±+反応がみられ、抑圧的で不安や不満もいわず働き続けようとする傾向がみられた。C=+±反応から甘えたい欲求と甘えきれない葛藤が強いことがみられた。これらのことから、口愛期の母親への依存と分離のコンプレックスがあることがとらえられた。

iv) Dさんのテスト結果の考察

Dさんのテスト結果から、Fig. 6のと通りの心の層内容がとらえられた。つまり、Dさんは、まだ青年期の自我発達上の危機状態には直面しておらず、意識水準と前意

水準	心の内容	心理テスト
意識水準	とくに葛藤なし	青年期の自我発達上の危機状態尺度
前意識水準	とくに葛藤なし	物語記述テスト
無意識水準	口愛期の依存と分離のコンプレックス有り	ソンディ・テスト

Fig. 6 Dさんの心の層内容

識水準ではエレクトラの葛藤もなく、無意識水準では、口愛期における母親への依存と分離のコンプレックスが潜在していることがとらえられた。

3. 総合的考察

以上の4つのケースより、本研究の結果では、青年期の自我発達上の危機状態は、無意識水準のエディプス(エレクトラ)・コンプレックスが大きく影響を及ぼしていないことが示唆された。

むしろ、A君やBさんの例のように青年期の自我発達上の危機状態は、前意識水準の幼児期の親子関係の葛藤と関連しており、このことは危機状態の内容からいって当然の結果と思われる。すでに長尾(1999)の研究によって青年期の自我発達上の危機状態とFriedman(1952)の物語記述テストを用いたエディプス(エレクトラ)・コンプレックスとの関連は強くはないことが明らかにされているが、A君とBさんのソンディ・テストの結果から、口愛期あるいは男根期における親子関係の葛藤から発していると思われる前意識水準の親子関係の葛藤が青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼしている例もあることが明らかにされた。また、Dさんのソンディ・テストの結果にもとづけば、口愛期の母親との依存と分離のコンプレックスを無意識世界に潜伏させて青年期の自我発達上の危機状態にいないケースもあることが明らかにされた。

4ケースの結果だけでFig. 1に示す仮説については論じられないが、4ケースの各3種類の心理テストの結果はそれぞれ異なっており、とくに質問紙法の青年期の自我発達上の危機状態尺度の結果と投影法の物語記述テストの結果が関連があることから、精神分析学派や分析心理学派の臨床家が唱えるように意識水準→前意識水準→無意識水準までの心の層構造が存在することが示唆された。

【まとめと問題点】

青年期の自我発達上の危機状態に対して無意識水準のエディプス(エレクトラ)・コンプレックスが影響しているかを明らかにするために、健常高校1年生男女114名に青年期の自

我発達上の危機状態尺度を実施した。この結果をもとに危機状態総得点が高得点の者男女各1名、低得点の者男女各1名に対して、Friedman (1952)による物語記述テストとソンディ・テストを実施した。

その結果、青年期の自我発達上の危機状態尺度とソンディ・テストから、(1)青年期の自我発達上の危機状態に対して無意識水準のエディプス (エレクトラ)・コンプレックスは影響していないこと、また、(2)青年期の自我発達上の危機状態尺度と物語記述テストから、青年期の自我発達上の危機状態に対して前意識水準での幼児期の親子関係の葛藤が影響していることが明らかにされた。さらに、(3)4名に対する3種類のテストの結果から、意識水準→前意識水準→無意識水準までの心の層構造が存在することが示唆された。

しかし、本研究の結果を一般化していくには、多くの問題点があると思われる。たとえば、(1)4ケースの結果のみで本研究の仮説を一般化して論じられない。さらに多くのケースが必要と思われる。(2)ソンディ・テストは、一般には1～7日の間隔で10回実施する方法であるが、本研究では、1回のみの実施であり、本研究の結果の信頼性に関しては、問題がある。(3)Friedman (1952)による物語記述テストに関して、果たして前意識水準の内容を測定しているのかどうかの妥当性の検討が必要である。(4)C君の例のように無意識水準にエディプス・コンプレックスが潜在していても青年期の自我発達上の危機状態に陥らない自我の内容や状態についてが明らかにされていないなどがあげられる。これらの問題点を今後、検討していく必要があると思われる。

【引用文献】

- Abraham, K. 1924 *The Influence of oral erotism*, London: Hogarth Press.
- 馬場謙一 1975 エディプス・コンプレックス (加藤正明・保崎秀夫・笠原嘉・宮本忠雄・小此木啓吾 編 精神医学事典) 弘文堂 54.
- Coulter, W. M. 1959 The Szondi test and the prediction of antisocial behavior. *Journal of Projective Techniques*, 23, 24-29.
- Freud, S. 1905 *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. Frankfurt; Fischer Verlag. (懸田克躬 訳 1953 フロイド選集5 日本教文社)
- Freud, S. 1915 *Das Unbewußte*. Frankfurt; Fischer Verlag. (井村恒郎 訳 1970 フロイト著作集6 人文書院)
- Freud, S. 1928 *Dostojewski und die Vätertotung*. Frankfurt; Fischer Verlag. (高橋義孝・池田絃一 訳 1970 フロイド選集7 日本教文社)
- Friedman, S. M. 1952 An empirical study of the castration and oedipus complex. *Genetic Psychology of Monographs*, 46, 61-130
- Jung, C. G. 1913 *Versuch einer Darstellung der Psychoanalytischen Theories*. Zurich: Rascher Verlag.
- Jung, C. G. 1952 *Über die Archetypen des Kollektiven Unbewußten*. Zurich: Rascher Verlag.

- 河合隼雄 1977 無意識の構造 中公新書
- 宮城音弥 1956 心理学小辞典 岩波書店
- 村瀬孝雄 1976 青年期危機概念をめぐる実証的考察 (笠原嘉・清水将之・伊藤克彦 編 青年の精神病理) 弘文堂 29-52.
- 長尾 博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み 教育心理学研究、37、71-77.
- 長尾 博 1992 青年期の自我発達上の危機状態尺度の併存的妥当性の検討と危機状態の縦断的研究 カウンセリング研究、25、107-111.
- 長尾 博 1995 青年期の自我発達上の危機状態尺度に関する信頼性の検討 活水論文集、38、49-57.
- 長尾 博 1996a エディプス・コンプレックスの測定の試み 九州大学心理臨床学研究、15、11-24.
- 長尾 博 1996b エレクトラ・コンプレックスの測定と交友関係・家族関係との関連 1995年度活水女子短期大学生生活学科特別研究、15.
- 長尾 博 1999 青年期の自我発達上の危機状態と自我の強さ、およびエディプス(エレクトラ)・コンプレックスとの関係 カウンセリング研究、32、245-253.
- 長尾 博 2002 青年期の自我発達上の危機状態の学年差・性差と自意識及び身体イメージ満足度との関係 活水論文集、45、107-129.
- 大塚義孝 1974 衝動病理学 誠信書房
- 大塚義孝 2000 ソンディ・テスト (詫摩武俊・鈴木乙史・清水弘司・松井 豊 編 シリーズ・人間と性格第6巻 性格の測定と評価) プレーン出版 112.
- Reich, W. 1933 *Charakter analyse*. Wien; Selbstverlag. (小此木啓吾 訳 1964 性格分析 岩崎学術出版)
- Shneidman, E. S. 1949 Some comparisons among the four picture test, thematic apperception test, and make a picture story test. *Journal of Projective Techniques*, 13, 150-154.
- Szondi, L. 1937 Contributions to fate analysis. *Acta Psychologica*, 3, 1-80.
- Szondi, L. 1947 *Lehrbuch der Expellimentellen Triebdiagnostik*. Bern; Huber Verlag. (佐竹隆三 訳 1964 実験衝動診断法 日本出版貿易)
- 山本和郎 1999 TAT (恩田 彰・伊藤隆二 編 臨床心理学辞典) 八千代出版 367.
- Yarritu, F. S. 1955 Validierung des Szondi Testes durch eine Gruppen-untersuchung von 2352 Fällen. *Szondi-ana*, 2, 65-71.

(2005年1月31日受理)